

Stop the pigeon

鳩とはわれわれのことだ。存在の屑で満足するとき、「ないよりまし」と考えて、より大きな鳥どもの力にひれ伏すとき。

どの鳩も、生まれたときは白く霊妙な鳩である。社会という仕掛けと都市という環境が、それを巣の鳩に、次いで母のもとの鳩、小学校の鳩、中学校の鳩、高校の鳩、大学の鳩に変え、最後には汚らしい都市の成鳩に変えてしまう。

六千年前、人間は自然の諸要素を、とりわけ動物や昆虫を、人間と異なるものとは考えず、祖先のあらわれとして、特別な、ときには魔法じみた性質をそなえたトーテムとして見ていた。

農耕と牧畜の発明ののち、人は自らを他の生きものより上に置くようになった。以後今日にいたる数世紀のあいだ、動物はさまざまな目的のために使われ、利用され、搾取されてきた。食用（カルロ・ジュスティの鳩の生ハムなるものの存在まで知った）から、伴侶として。労働から、戦争へ——たとえばアメリカ陸軍第七十七歩兵師団の通信隊が用いた鳩、シェール・アミの物語がある。この出来事は多くの人にとって、都市に住む人々にとってさえ、鳩というものの存在そのものをある意味で正当化し、彼らが地上にやって来た理由を説明してくれる。すなわち、多次元の生きものとして、つかまえようのない実体なき亡霊として、神風めいた自己爆発によって繁殖しうる異星の生きものとして。老いた鳩の身体の一部は散り、一部は路上で噛み砕かれて残り、若い鳩の新しい身体が街の空を滑ってゆく。注意されたい。街で鳩の雛を見た者は一人もいない。街の鳩を食べようとする者も一人もいない。だが街の鳩は、見つけたものは何でも食べる。

おそらくはこうしたいくつもの理由のどれかのせいで、近ごろ鳩やほかの動物が人間ぶるのを、そしてその逆を、見かけるようになった。

逆さまの動物崇拜とでも言うべきものが、ますます信奉者を増やしている。そこでは、非人間的な動物へと変わることが、自然への回帰を意味するのだという。

官僚の鳩たち。腐りかけたわれわれの体制の役人の服を着て、きちんとした同調者となり、読んだばかりの条文を引用する、体制の熱心で無自覚な歯車。彼らの唯一の目的は、生き延びるためにしがみついたその体制を養うことだ。権力の屑を食い、嘆きの連禱を垂れ流す。

ダグラス・アダムズのヴォゴン人とドストエフスキーの官僚との恐るべき混合、それが三部複写となって、たえず他人の行く手をふさぐことに専心している。

彼らはパイと鳴き、メエと鳴き、うなり、鼻を鳴らし、叫ぶ。みな声をそろえて。亡き祖先たちの過去の名誉を守ろうとしながら。

そのあいだにも、彼らのせいで空から糞が降る。

鳩は——ピエモンテ方言で「i piciu」、ロンバルディア方言で「i pirla」、いずれも愚か者や間抜け、そして男性器を指す言葉でもある。イタリア語では鳥全般がおおむねそうだ——今

日の、考えることをしない人類の隠喩である。だが同時に、愛おしげに喉を鳴らし、問いかけるようにこちらを見る魔法の動物でもある。おそらくはただの、われわれの祖先。沈黙し、飛びながら見つめる者たち。

モンターレの詩にこうある。

Prima di chiudere gli occhi mi hai detto pirla
una parola gergale
non traducibile
Da allora
me la porto addosso
come un marchio che resiste alla pomice
Ci sono anche altri pirla nel mondo
ma come riconoscerli?
I pirla non sanno di esserlo
Se pure ne fossero informati
tenterebbero di scollarsi
con le unghie
quello stinna.

ある者たちは変身をとげ、その結果、鳩の頭が大都市を埋め尽くした。またある者たちは、ジュゼッペ・ベルヴェデーレ（ムッシュー・ピジョン）のように、鳩の世話をする。自分のなかのもっとも人間的な部分を抱きしめるために。いずれにせよ、われわれはみな、止めようのない鳩である。

Luca Motolese

motolese.com — 原文はイタリア語